

自立する母子家庭

そこには周囲の人々の協力が

すべての母子家庭が、こうした国や県等の対策にすがっているわけではない。男に負けない気力と、周囲の温い協力力で立派に自立した人も少なくない。牛使う勝気も生るる吾の今を
友よ哀れと嘆き給ふな
とうたう俗明村の中川美津子さん。女手



「女でもやればできますよ」と朗らかな森内さん

一つで開拓地に入植して、成功の見通しをつけた湯浦町の森内いさをさん(三十才)もその好例。森内さんは全国でも珍しい母子家庭の開拓地入植を強引にやっつての、今では陸稲、甘藷茶を一、

四ヘクタール(約一町四反)も植えつけている。

ここは芦北郡湯浦町、と云つても、駅から歩いて約二時間かゝる「山の神開拓地」。終戦以来、二人の子供をかゝえて売り食い、生活扶助受給、学校の小使いさんと苦勞を重ねてこの開拓地に入つたのが三十一年の春。現在までに三回も台風のために収穫が殆んどなかつたり、屋根を飛ばされ、壁をおとされたり。

「三回目の時は、やはり女手ではだめだと、ぐやし涙がこぼれました。」と云う。その間親戚はもちろん、町の母子会や福祉事務所、町役場からも登つてきて励ました。同じ開拓地の人々も、男手のない森内さんをよく扶けて何かと面倒をみてくれた。森内さんは見舞に來た母子会の人々と記念に茶を植えた。

その茶を今年はじめに摘んでみた。「茶つみ初め」は母子会長の福崎さん。「その時は感激しましたよ。」と云つてそのお茶をすゝめてくれる。人々の温い愛情がしみ込んだ様に舌に甘かつた。

長男の勝夫君(十五才)はいま鹿本の伝習農場で勉強している。その先生は開拓地の営農方法を手紙に書いて、毎週送つてくれる。

「周囲の人々の親切が身に沁みる。」と感激している。又「子供の為に、基礎を

▼里親、職親の相
以上のように子供の問題について相談がさまざまに形に相談所に舞込んでくる。年間の取扱件数二六八六件(昨年度)月平均二二五件。それらを内容別にみると一番多いのが触法行為の相談と不良行為の相談だ。これは警察や福祉事務所から経由してくるものだが、受付件数の半分以上を占めているのが注目される。次に多いのが養護相談だ。以下教護、肢体不自由児、精薄児などの相談という順になつている。

後をたたない不幸児……★
右のような状況を傾向的にみて考えら



相談所で一時収容される子供は依然として多い……★
(写真は、中央所長や保母さんと一緒に遊ぶ収容児たち)

れることは、生活の困窮と親の無自覚ということが一番大きな原因となつていくことである。戦后いち早く設けられた児童相談所は、いわば戦災孤児の一時収容という形で発足したもので、児童福祉的な本格的なものではなかつた。それが現在では、戦災孤児にとつて代つて生活困窮児か家庭環境の犠牲による子供が依然として後を絶たないという実状にありしかも実質的には不幸児が多くなつていくということである。

窓口を訪ねる親(母親が多い)は安易な気持ちで、働きたいから子供を預つて呉れと相談する。だが殆んど親が、一年後の引取りを約束しても、殆んどが相談所へは寄つてこない。果して親子の愛情があるのか疑いたくなるのである。そういう親たちに限つて、相談所は子供を無条件に預つてくれるところだと思つていいのだろうか。

問題が起る前の話し合いを……★
こゝで相談所の意見をきいてみよう。実戸所長は「問題児については起つてからそれを措置する」と云うのではなく、問題が起る前に親たちや学校側とよく話し合い啓蒙に努めるべきで、そのための巡回指導もできれば本格的に実施したい。多分に子供に幸せを願わない親はおそらく一人もいないと思う。そのための子供に対する親の願い、要求も、もつと真剣にあるべきだ。一時のがれな親たちの無自覚さを何とか反省してほしいといつてゐる。

つくつておかなければ……という気持ちがあるから、皆さんの励ましに添えて頑張れるのです。」との言葉は、母子家庭では子供への愛情が生活の大きな支えとなつている事を物語つてゐる。

このほかにも、女手一つで立上つた母親は数限りない。そこには、いつも周囲の人々の温い協力が集められている。又母親自身の気丈夫さと明朗さが、ともすれば沈みがちな家庭を盛り立ててきた事も見逃せない。

母子会連盟の光永さんも「父親がいな」という事で、家庭に空虚な雰囲気をつ

児童相談所の窓口で……

ほしい親の自覚と愛情

児童相談所は、児童福祉法に定められているように、児童が心身ともにすこやかに生まれ、且つ育成されるよう、すべての児童すべての保護者に奉仕する役所です。と相談所の案内しおりに説明してある。一口にいえば、子供たちの利益をまもるための、子供たちの代弁者といふことができよう。この相談所は県内に熊本と八代の二カ所設置されている。まず、はじめに児童相談所をやつていく仕事にあらましましからのべてみよう。

くつてはいけない。いつも朗らかに、自信をもつて……。」と云つてゐる。
× × ×
母子家庭の問題はまだ尽きない。周囲の人々との関係、生活、内職、教育、進学、再婚等々……今日もまた、多くの悩みをいだいた母と子は、幸せを求めて長い道を歩いている。
だが、その母と子のあとを、親のない子供達が、幸せを求めず歩み知らず歩き続けていることも忘れてはならない。ではここで、その子供達にも目を転じてみよう。

薄幸の子らに愛の手を……

ひかり童園にみる子供たち

家庭の不和や、家庭環境悪で親の愛情から遠ざけられた子、親のない身なし子、そういった子供たちのための児童福祉収容施設が今県下に三十一ヶ所ある。その中には、養護施設や乳児のための施設、盲ろうあ、虚弱児、肢体不自由児、のための施設がそれぞれ設けられている。

それでは、これから水俣市にある「ひかり童園」の現地の姿をこゝに紹介しながら、そこにみられる子供の問題や、施設の実状などについて触れてみることにしよう。

明るい環境で……★

水俣市の山の手にある「ひかり童園」。こゝにも薄幸の子七十九名が温い眼に見まもられながら暮らしている。園長は堀岡乗さん。とかく世間では「施設の子」という嫌な見方をする傾向もないではないが、もはやそういった偏見は正されねばならないものだ。この童園の子たちはそれを裏書きするように明るくて素直だ。園長、指導員、保母たちはいわば親がわりの立場にあるが、子供たちはすつかり甘え切つて、日頃の生活態度も全く家庭的なのだ。幼児の十名をのぞいては、みな童園か



保母さんはやさしい母親がわり……★